

「黑板職人黒崎君」

西 佑真

登場人物

黒崎拓也 (12) 中学1年生

市野瀬美子 (12) クラスメイト

緒方翔平 (12) クラスメイト。サッカー部

高橋住子 (12) クラスメイト。学級委員長

今野智美 (12) クラスメイト。美子の友達

山口幸大 (12) クラスメイト

田中裕太 (34) 担任の先生

馬場宏典 (52) 社会の先生

真中

女子生徒A、B、C

男子生徒A

数学教師

○中学校・廊下（朝）

T「4月」

静かな廊下。

○同・教室

30名程のクラス。

数学の授業が行われている。

教壇に立つ数学の先生は、熱心に授業
をしている。

数学教師「いいか、数学っていうのは、国語
などと違って、正解は一つだからな」

先生の話に集中して聞いている生徒達。
窓側の一番後ろの席に座っているのは、
中学2年生の黒崎拓也（12）

机には、数学の教科書とノートが綺麗
に並べられており、シャープペンシル
と、赤ペン、消しゴムも綺麗に並べら
れている。

黒崎、窓の景色をボーッと眺める。

黒崎「……」

黒崎の右隣には、クラスメイトの、市野瀬美子（12）が座っており、熱心に黒板の文字を板書している。黒崎、黒板を見て板書始める。

○タイトル『黒板職人黒崎君』

○同・中庭
ベンチでお弁当を食べている3人の女子生徒。

○同・教室

黒板の右端の下には、「日直、黒崎、山口」と書かれている。黒崎、黒板消しで、黒板に書かれている数学の公式を消している。黒崎、端から端まで、綺麗に消していく。その目は、真面目で真剣。教室で弁当を食べている女子生徒の3

人グループ。一人が小声で、

女子生徒A「人がご飯、食べている時、普通、

黒板消す？」

女子生徒B「ねえ。チョークの粉が舞ってマ

ジで迷惑」

女子生徒C「これだから、男子は」

女子生徒の話し声は黒崎には、聞こえていない。

黒崎、黒板の溝に溜まったチョークの粉をミニほうきで真ん中の穴に集める。

黒崎「……」

黒板は美しい程に綺麗。

× × ×

静かな教室。

教壇では、担任の田中裕太（34）による国語の授業が行われている。

田中、白のチョークで谷川俊太郎の

「生きる」の文章を書いている。

黒崎、黒板の文字を板書する。

田中、チョークに力を入れてしまいチ

チョークが折れてしまう。

折れたチョークが床に落ちる。

田中を見る黒崎。

黒崎「……」

田中、折れたチョークを拾い上げ、黒板の溝の中央にある穴に入れる。

何事も無かったように新しいチョークで、文章を書き始める田中。

黒崎、ノートの上に、「正」の文字の一角目を書く。

× × ×

チャイムが鳴り響く教室。

田中「じゃあ、今日は、ここまで。今日、勉強した事は、テストに必ず出るから、必ず各自で復習する事。では挨拶」

生徒達「ありがとうございます」

田中「ありがとうございます」

教室が、少し騒がしくなる。

田中、振り返り、黒板消しで黒板の文字を消していく。

田中「もう、板書しただろ。消すぞ」

大雑把に消していく田中。

黒板は所々に、白い部分が残っており、少し汚い。

田中、黒板消しを置いて、教室を出て行く。

黒崎のノートの端には、「正」の文字の三角目まで書かれている。

黒崎「……」

黒崎、ノートを閉じる。

突然、美子が黒崎に、

美子「黒崎君だよね？」

黒崎「え？あ、うん」

美子「今日の日直」

黒崎「あ、うん」

美子「黒板が凄く綺麗だったから、とても板書しやすかった」

黒崎「あ、うん」

美子「他の生徒だと、綺麗に掃除しないから、黒板が汚くて、見えづらいんだよね」

黒崎「……」

美子「何か、コツとかあるの？」

黒崎「いや、特に」

美子「これからずっと、黒崎君が、黒板掃除
をしてくれたら、良いのになあ」

黒崎「……」

教室の出口にいる、美子の友達、今野

智美（12）が、

智美「市野瀬さん！次、体育だよ」

美子「うん。（振り返り）」

美子、体操着を持って、教室の出口ま
で、小走りで向かう美子。

黒崎「……」

○同・グラウンド

グラウンドでは、男子生徒がサッカー
をしている。

遠くの方で、男子のサッカーを見てい
る女子生徒達。

美子も誰かを探している様子。

その中で、目立つプレイをするのは、サッカー部の緒方翔平（12）ドリブルで、3人の生徒をかわし、右足を振りぬく。

ボールは、ゴールネットの左上を突き刺す。

緒方の周りに、仲間の生徒が集まり、ハイタッチをする。

緒方のゴールを見ていた女子生徒達、女子生徒A「かっこいいね、緒方君」

女子生徒B「サッカー部でも、1年なのに、すぐレギュラーなんだって」

女子生徒A「へー、凄いなあ」
智美、小声で美子に、

智美「緒方君、かっこいいね」

美子「……うん」

○同・教室

黒板を掃除している黒崎。

黒崎「……」

黒板が、どんどん綺麗になっていく。
黒崎の机には、体操着袋が、開かずに置かれている。

○同・外観（夕方）

夕日に染まる校舎。

○同・教室

かばんを持って教室を出て行く生徒達。
また黒板を掃除している黒崎。

黒崎「……」

かばんを持った美子、智美と一緒に教室を出ようとするが、黒板を掃除している黒崎を見て、黒崎の元に駆け寄る。

美子「黒崎君、日直、お疲れ」

黒崎「うん」

美子、ニコニコしている。

智美の声「市野瀬さん、帰ろう」

美子、振り返り、

美子「うん！」

黙々と黒板消しで、黒板を掃除する黒崎。

美子「じゃあ、また明日」

黒崎「うん」

黒崎に背を向けて、教室を出て行く美子。

黒崎「……」

○同・校舎裏

リフティングをしている緒方。

座って、紙パックのジュースを飲んで

いるのは、緒方の友達の山口幸大（1

2）

山口「今日、部活は？」

緒方「休み。山口は、部活入らないの？」

山口「俺は、いいかな」

緒方「てか、今日、お前、日直だろ？サボっ

てていいのかよ？」

山口「あいつ、名前なんつったけな」

緒方「ああ、黒崎？」

山口「そう、黒崎がやっつけていてくれるから大丈夫だよ」

緒方「あんまり、全部押し付けんなよ」

山口「大丈夫だよ。それよりさ、市野瀬さんとは、どうなの？」

緒方「え？別に何もねえよ」

○同・廊下

夕日の光が差し込む廊下を歩く、かばんを持った黒崎。

黒崎「……」

○同・外観（朝）

T「5月」

○同・教室

黒板の右端の下には「日直、鈴木、真中」と書かれている。

黒板消しで、黒板を綺麗にしている黒崎。

黒崎「……」

騒がしい、教室内。

黙々と、黒板を綺麗にしていった黒崎、

黒板消しを、黒板の溝に置く。

綺麗になった黒板を見る黒崎。

黒崎「……」

黒崎、黒板の溝の中央に2つある箱の

左側にある箱を開ける。

新品のチョークが並べられており、そ

の中から、白、黄、赤のチョークを溝

に置く。

チャイムが鳴る。

生徒達が、一斉に席に着く。

黒崎も、自分の席に向かう。

田中が、教室に入ってくる。

田中、黒板を見て、一瞬、立ち止まり、

田中「おお」

教壇に向かい立つ田中。

田中「おはよう」

生徒達「おはようございます」

田中「今日の日は……」

黒板の右端の下を見る田中、

田中「鈴木と真中か……黒板は誰が綺麗に

したんだ？」

お調子者の真中が手を挙げて、

真中「はい！俺です」

教室に笑いが起こる。

田中「お前、意外と綺麗好きなんだな」

真中「はい」

美子、左隣の黒崎を見る。

黒崎は、窓の景色を見ている。

黒崎「……」

× × ×

教室では、席に着いて寝ている人や、

読書をしている人がいる。

教室の前の左端では、黒崎が黒板消し

クリーナーを使って黒板消しを綺麗に

している。

指先に神経を集中する黒崎。

黒崎「……」

真剣な目で、黒板消しを上下に滑らす
教室の後ろで、その様子を見ていた学
級委員長の高橋住子（12）と女子生
徒A、B。

住子「まるで、かんな削りをしているみたい」

女子生徒A「うん。職人だ……」

小さく拍手する女子生徒B。

黒板消しクリーナーの電源を切る黒崎。
綺麗になった黒板消しを見て、

黒崎「……」

黒板の溝に黒板消しをそっと置く。

黒崎の元に向かう住子と、女子生徒A、
B。

住子「黒崎君！」

黒崎「はい」

住子「黒板掃除、お疲れ」

黒崎「……」

女子生徒A「黒崎君は、黒板掃除が上手だね」

女子生徒B「これから、黒板職人って呼んで
いい？」

黒崎「ご自由に」

住子「今日は黒崎君が日直だっけ？」

黒崎「……違います」

住子「学級委員長として、言わしてもらいます。次からは、あなたが日直の時だけ、黒板掃除をしてください」

女子生徒A「でも、高橋さん。そうになると、

黒崎君は、このクラスで、どんな役割が」

住子「静かに」

黒崎「……」

無言で、黒板の中央にある、箱を取り出す。

箱には、折れて小さくなったチョークが、たくさんある。

黒崎「折れたチョーク達は、どうすれば良いのでしょうか？」

住子「そんなもん、捨ててしまえば？」

黒崎「それで、いいのでしょうか？」

住子「……別に良いでしょ」

黒崎「この子達は……」

女子生徒B、小声で、

女子生徒B「この子達って」

黒崎「先生や、生徒、学校に殺されたんだ」

住子「……何言ってるの？」

女子生徒A「キモ」

女子生徒B「行こう」

住子「とにかく、黒板掃除は日直がやるから」

住子と女子生徒A、B、小走りで教室

を出て行く。

黒崎「……」

○同・廊下

廊下の掲示板の前には、たくさんの人
ばかり。

掲示板には、中間テスト成績の順位が
張り出されている。

美子、人だかりの後ろの方で、つま先
を伸ばしている。

しかし、中々、見えない。

人だかりから出てきた智美、美子に、

智美「市野瀬さん、5位！」

美子「え？本当に？」

智美「ここから、見えない？」

美子「うーん」

再び、つま先を伸ばす。少しだけ見えた、
「5位、市野瀬美子」の文字。

美子「あ！本当だ」

智美「でしょ！おめでとう」

両手を握り合う美子と智美。

智美「市野瀬さんは、かわいいし、頭も良くて
凄いなあ。」

手を離す美子と智美。

美子「え？まあ、私、一人だけの力じゃない
し……」

○同・教室

席に着いている黒崎、引き出しから
会の教科書を取り出し、机の上に置く。
席に着く美子。隣の黒崎に、

美子「ねえ、黒崎君」

黒崎「うん？」

美子「中間テストの順位、張り出されてたよ」

黒崎「へえ」

美子「見た？」

黒崎「まだ」

美子「黒崎君が、黒板をいつも綺麗にしてくれてるおかげで、私の成績が上がったよ」

黒崎「いや、別に僕のおかげでは」

美子「黒崎君が、黒板を綺麗にすると、板書がしやすいんだよね」

黒崎「……」

美子「ありがとうね」

ニッコリ、微笑む美子。

黒崎「う、うん」

チャイムが鳴る。

教室に社会の先生、馬場弘典（52）が入って来る。

教壇に向かい立つ馬場。

馬場「では、社会の授業を始めたいと思います」

教室は、少し騒がしい。

後ろの入り口から、遅れて入ってくる
男子生徒。

後ろを振り返り、ため息をする住子。

馬場「はい、みんなは、ちゃんと教科書は持
ってきたかな？」

ニコニコしている馬場。

馬場「……はい」

後ろを振り返り、黒板を見る。

綺麗にされている黒板を見て、

馬場「……」

今一度、生徒達を見る。生徒達は、お
喋りをしており、寝ている人までいる。

黒板消しを手取る馬場。

黒板消しも綺麗にされていて、溝の部
分には、新品のチョークが3色、並べ
られている。

馬場「……」

窓の景色を見ている黒崎。

美子の斜め右の席に座っている緒方、

後ろを振り返り、美子を見る。

緒方の視線に気づいた美子、口パクで、

美子「（前、向いて）」

緒方「（嫌だ）」

微笑む美子。前を向く緒方。

黒崎は、まだ窓の景色を見ている。

黒崎「……」

馬場（M）「誰だ？黒板を掃除したのは」

○同・外観

T「6月」

○同・廊下

男子トイレから出てきた黒崎、手をハ
ンカチで拭いている。

廊下を歩くと、前方から美子と智美が
並んで歩いている。

智美「市野瀬さん、どこの高校、受験するか
決めた？」

美子「一応、桜高」

智美「桜高！やっぱり、凄いな」

美子とすれ違う黒崎。

美子「黒崎君、おはよう」

黒崎「あ、おはよう」

廊下を歩き続ける黒崎。

後ろから、美子と智美の話声が聞こえる。

黒崎「……」

○同・教室

教室に入ってきた黒崎。

黒板の溝にチョークが無い事に気付く。

溝の真ん中にある箱を開けると、中に

もチョークが無い。

黒崎、教室の前方の左端にある先生の

机に座っている田中に、

黒崎「先生」

田中「うん？」

黒崎「チョークが無いのですが」

田中「ああ、悪いな。社会の馬場先生の所に、

取りに行ってもらっていいか？」

黒崎「はい」

田中「視聴覚教室の隣の部屋にいるから」

黒崎「分かりました」

黒崎、教室を出て行く。

○同・視聴覚教室の隣の部屋前

ドアをノックする黒崎。

中から、

馬場の声「どうぞ」

黒崎「失礼します」

黒崎、部屋に入る。

○同・視聴覚教室の隣の部屋

部屋に入ってきた黒崎。

黒崎「すみません」

机でプリント整理をしていた馬場、

馬場「はい？」

黒崎「チョークが無くなったので、取りに来
ました」

馬場「ああ、ちょっと待ってて」

席から、立ちあがり棚に向かう馬場。

棚から、チョークの箱を取り出し、

馬場「白、10本ぐらい？」

黒崎「白5本に、黄色3本、青1に、赤1で」

馬場「……随分、細かいんだね」

黒崎「どの先生が、何本折って、どんな色を

よく使うのか、ノートに記録しているので」

馬場「そうか、それは偉いね」

白のチョーク5本を黒崎に渡す馬場。

馬場「そうやって、記録していると、無駄が

出ないから良いね」

受け取る黒崎、

黒崎「ありがとうございます」

馬場「後は、黄色3に、青1、赤1ね」

言われた本数のチョークを準備する馬

場。

馬場「もしかして、君がいつも、黒板を綺麗
にしているのかな？」

黒崎「……」

馬場「僕ね、あの黒板で授業するのが、とても大好きでね。何より気持ちがいいんだ」

チヨークを黒崎に渡す馬場。

馬場「ありがとうね」

チヨークを受け取る黒崎、

黒崎「ありがとうございます」

部屋を出て行く黒崎。

馬場「……（微笑む）」

○同・教室

黒板消しで、黒板を綺麗にしている黒崎。

黒崎「……」

教室の後ろで腕組をしながら黒崎を見ている住子。

住子「……チッ」

黒崎は、清々しい顔で黒板を綺麗にしている。

黒崎「……」

○同・廊下（朝）

T「7月」

教室から、住子の声がする。

○同・教室

ホームルームのクラス。

教壇には、住子が立っている。

住子「学級委員長として、この事態を見逃す

訳にはいきません！」

住子の声に耳を傾ける生徒達。

田中も、席に着き話を聞いている。

田中「……」

住子「黒崎君が、日直では無い時にも関わら

ず、黒板を掃除する事は、その日、日直の

人の仕事を奪う事になるのです。果たして

それでいいのでしょうか？」

真中「俺は、仕事が減るからラッキーだけど」

住子「それはダメです。そもそも、真中君み

たいな人がいるから、私はこうして、みん

なの前で話をしてるんです」

真中「……」

女子生徒A「でも、黒崎君が掃除した黒板は綺麗だ……けど」

住子「確かに、黒崎君の黒板を綺麗にする技術は認めます。でしたら、その技術をクラスのみんに広めて、みんなが平等に」

男子生徒A「あんな技術、マネ出来ねえよ」
クラスが騒がしくなる。

住子「第一、クラスの輪を乱すのは、良くない事だと思います」

田中、口を隠しながら、欠伸をする。

黒崎「……」

黒崎を見る美子。

美子「……」

緒方、後ろを振り返り、黒崎に、

緒方「黒崎！お前は、どうなんだよ？」

黒崎「……」

住子「それと、あと一つ、黒崎君には2年生になるまで金輪際、黒板を掃除する事を禁止します」

緒方「お前が勝手に決めんなよ」

住子「全ては平等の為です。黒崎君は今までに他の生徒の何倍以上も黒板掃除をしています」

黒崎「僕は……」

クラスメイトが、黒崎に注目する。

黒崎「……高橋さんの意見に賛成します」

美子「……（黒崎を見る）」

緒方「……」

住子「はい。では、黒板掃除は従来の通り

日直の人がすると言う事で良いですか？」

拍手がパラパラ起こり、次第に大きくなる。

美子も戸惑いながら小さく拍手する。

田中「よし、じゃあ、これで決まりだな。今

日も一日、頑張ってこう！」

黒崎「……」

○同・外観（夕方）

夕日に染まる校舎。

○同・視聴覚教室の隣の部屋

テーブルにお茶を運ぶ馬場。

椅子に座っている黒崎。

手には、小さな銀の箱を持っている。

馬場「はい、どうぞ」

黒崎「ありがとうございます」

黒崎の対面に座る馬場。

馬場「そうか、それは仕方ないね。クラスの

決まり事なら」

黒崎「……はい」

馬場、黒崎が持っている銀の箱を見て、

馬場「それは？」

黒崎、銀の箱をテーブルの上に置いて、

黒崎「折れて短くなったチョーク達です」

銀の箱には、短くなった様々な色のチ

ョークが入っている。

銀の箱を手取る馬場。

黒崎「どう、処分していいのかわからなくて」

馬場「……そうか」

黒崎「チョークの貢献度って、結構、大きい

と思うんです。チョークが無いと、授業が出来ないし、授業が出来ないと、勉強が出来ない」

馬場「……（微笑む）」

黒崎「良い高校にも入れなくて、良い大学にも入れない。最終的には幸せになれないと思うんです」

馬場「そうかな」

黒崎「え？」

馬場「そんな事は無いと思うよ」

黒崎「……」

馬場「黒崎君は誰か好きな人いる？」

黒崎「いえ」

馬場「誰かを好きになって、その人の笑顔を
見られるだけでも、幸せの一つなんじゃないかな？」

黒崎「……」

馬場「話は変わるけど、チョークって、儂いよね」

黒崎「……」

馬場「鉛筆とかは、落ちても芯が折れるだけ。
また削って再び使える」

黒崎「……」

馬場「でも、チョークは折れたら、中々、使
う事は難しい」

黒崎「……」

馬場、銀の箱から一本、白のチョーク
を取り出す。

馬場「でも、これは、まだ使えるんじゃない
のかな？」

馬場、黒崎にチョークを渡す。

受け取る黒崎。

黒崎「そうですね（チョークを見て）」

○同・教室

教室に入ってきた黒崎。

真ん中の席に腰かけている山口、窓の
景色を見ている。

教室には黒崎と山口しかいない。

山口、振り返り、

山口「あ、まだいたのか」

黒崎「うん」

黒崎、銀の箱を黒板に戻しに向かう。

山口、それを見て、

山口「日直、お前に全部、押し付けてゴメン
な」

黒崎「別に大丈夫だよ」

山口「お前って偉いよな」

黒崎、振り返り、

黒崎「え？何が？」

山口「友達もいないのに、毎日、学校来て」

黒崎「……」

山口「俺は耐えられないな」

黒崎「今日、山口君は保健室にいたの？」

山口「何で知ってるの？」

黒崎「ホームルーム、いなかったから」

山口「俺の事なんか、気にかけてくれる奴い

たんだ」

黒崎「……いるよ」

山口「……」

黒崎、銀の箱から、短いチョークを取り出し、

黒崎「このチョークだって、まだ使える。山口君に、何があったか知らないけど、この銀の箱にある限り、折れても、短くなっても、まだ使える」

山口「お、おう」

黒崎「それにさっき、山口君は僕に友達がいなかったと言ったが、僕には黒板という友達がいる」

山口「……うん」

山口、かばんを持って、

山口「何かよく分かんないけど、ありがとう」

山口、猛ダツシュで教室を出て行く。

黒崎「……」

黒崎、黒板を見て触る。

黒崎「……」

○黒崎家・表（朝）

T「8月」

「黒崎」の表札。

○同・キッチン

冷蔵庫を開けて、牛乳を取り出す黒崎。
扉を閉めて、牛乳を紙パックのまま飲む。
む。

冷蔵庫には小さいホワイトボードが張られている。

ホワイトボードは、綺麗に消されておらず、所々に黒い文字が残っている。

黒崎「……」

扉を開けて、牛乳をしまう。

扉を閉めて、ペンの後ろに付いているスポンジでホワイトボードを綺麗にする黒崎。

黒崎「……」

○中学校・外観

T「9月」

○同・教室

騒がしい教室内。

黒板の前に立っている黒崎。

黒板は綺麗にされていない。

黒崎「……」

黒崎、黒板消しを取ろうとすると、突

然、住子に腕をつかまれる。

住子「あれ？あなた、黒板に用は無いはずよね？」

黒崎「……」

住子「あなたみたいに、一番静かな人が、ク
ラスの輪を乱すのよね」

黒崎「……」

住子、黒崎の手を離し、

住子「はい！今日の日直は、今野さん！黒板
が汚れてる！（手を叩きながら）」

黒崎、右手を握りしめる。

黒崎「……」

○同・廊下（朝）

T「10月」

○同・教室

教室では、国語の授業が行われている。
田中、汚い黒板に文字を書いていく。
板書をする黒崎。
美子も、板書をするが見えづらそうに
している。

美子「……（ため息）」

美子を見る黒崎、

黒崎「……」

○同・外観（夕方）

T「11月」

○同・廊下

黒崎、廊下を歩く。
掲示板に張られている順位表が視界に
入り、立ち止まる。
「30位、市野瀬美子」の文字を見つ

ける。

黒崎「……」

○同・図書室

静かな図書室。

勉強をしている美子。向かいには緒方が座っている。

美子「……」

緒方「なあ、美子（小声で）」

美子「何？」

緒方「今日もカラオケ行こうぜ」

美子「……翔平君。もう一緒に勉強するの

止めようか」

緒方「何だよ、急に」

美子「最初はね、緒方君のお陰で成績も上がったけど、付き合い始めてから、下がってきてるし」

緒方「別れるって事？」

美子「ううん。一緒に勉強するのは止めようって事。今まで通り一緒に帰ったりはしよ

うね」

緒方「……分かった」

美子「ごめんね」

○同・前（夕方）

T「12月」

下校する生徒達。

○同・教室

綺麗にされていない黒板を見ている黒崎。

黒崎「……」

教室に住子が入って来る。

住子「まだ、帰ってなかったの？」

黒崎「……」

住子「早く帰りなさいよ！」

黒崎「高橋さん」

住子「何？」

黒崎「僕に黒板を掃除させて下さい」

住子に頭を下げる黒崎。

住子「今日の日直は、真中君か……」

黒崎「……（頭を下げたまま）」

住子「明日、私の方から注意しときます。それに、この黒板は汚いので、明日の日直の今野さんに朝一に掃除をしてもらいます」

住子、教室の出口に向かう。

黒崎「……（頭を上げる）」

住子、教室の出口で立ち止まり、

住子「もし、明日の朝、黒板が綺麗になったら、あなたはもうこのクラスにいられないと思っ
てね」

教室を出て行く住子。

黒崎「……」

黒崎、黒板を見て、黒板消しを触ろうとする。

黒崎「……」

○同・前（朝）

登校する生徒達。

○同・教室

黒板の前は生徒達で、ごった返している。

教室に入ってきた美子、黒板の方へ向かう。

黒板が、とても綺麗になっている。

真中「俺じゃねえ……よ」

腕組みをしている住子。

住子「……じゃあ、今野さんの？」

智美「私じゃないです」

美子「黒崎君だよ！きっと黒崎君が綺麗にしてくれたんだよ！」

住子「……チッ」

田中が教室に入ってくる。

田中「おーい、どうしたんだ？みんな集まってる」

住子「先生！今日のホームルーム、私に時間をくれませんか？」

田中「お、おう」

後ろの入り口から、教室に入ってきた

黒崎。

住子「来た（黒崎に気付いて）」

美子「黒崎君（微笑みながら）」

黒崎、黙ったまま、自分の席に着く。

× × ×

教壇に立つ住子。

席に着いている生徒達と田中。

住子「みなさんお分かりの通り、黒板がいつ

もと違います。昨日の日直は真中君で、今

日の日直が今野さんであるにも関わらず」

黒崎「……」

住子「担当直入に聞きます。黒崎君、あなた

が綺麗にしたんですか？」

静かな教室内。

美子「……（黒崎を見る）」

黒崎「……僕が綺麗にしました」

住子、ため息をする。

住子「ルールを破ったんですね？」

黒崎「はい」

教室が騒がしくなる。

住子「困りましたね〜私達のクラスに、ルールを破る人がいるなんて。でも、どうして、ルールを破ったんですか？」

黒崎「……」

住子「はっきり言います。ルールを破る人が私達のクラスにいていいのでしょうか？」

黒崎「……」

美子「……」

美子が、急に立ち上がる。

住子「どうしたんですか？市野瀬さん」

美子「……このクラスに、いない人なんていません」

黒崎「……」

住子「……」

美子「みんな、みんな大事だと思います」

黒崎「……」

山口「……俺もそう思う」

美子「黒崎君は、このクラスに必要な人間です」

住子「……」

田中「もういいんじゃないか？ なっ」

住子「……はい」

椅子に座る美子。

黒崎「……」

× × ×

教壇に立つ馬場。社会の授業が行われている。

馬場、黒板に文字を書いていく。

馬場「……（微笑みながら）」

板書をしている美子。シャープンを置いて、隣の黒崎に小声で、

美子「見えやすい（笑顔）」

黒崎「……うん」

美子、再び、板書を始める。

黒崎「……（美子を見る）」

馬場の後ろ姿を見る黒崎。

○（回想）同・視聴覚教室の隣の部屋（夕方）

馬場、黒崎に、

馬場「誰かを好きになって、その人の笑顔を

見られるだけでも、幸せの一つなんじゃないかな？」

○同・教室（朝）

馬場の後ろ姿を見ている黒崎。

黒崎「……（少し笑う）」

「板書を始める黒崎。」

遠くの席から黒崎を見る住子。

住子「……」

○同・廊下（夕方）

夕日の光が差し込む廊下。

○同・教室

黒板の前に立っている黒崎。

右手には白のチョークを握っている。

黒崎「……」

黒崎、白のチョークで黒板の右端の下に「市野瀬さんが好き」と、文字を書く。

黒崎「……」

教室に美子が入って来る。

黒崎、慌てて文字の上にマグネットを
使って、プリントをかぶせる。

黒崎「……」

美子「どうしたの？黒崎君」

黒崎「あ、いや」

美子「うん（不思議そうな顔）」

美子、自分の席に向かい、引き出しか
ら、何かを探している。

黒崎「今日、とても嬉しかった」

美子「ああ、私もね、黒崎君には黒板を掃除
してもらいたかったし、それに、クラスで
いない人なんかいないし」

黒崎「これで、市野瀬さんの成績も上がるか
な？」

美子「ああ、うん」

黒崎「……」

美子、引き出しから、数学の教科書を
取り出し、教室の出口に向かう。

美子「じゃあ、また明日」

黒崎「うん」

教室を出て行く美子。

黒崎「……」

黒崎、廊下を見ると、仲良く歩く美子と、緒方の後ろ姿。

黒崎「……」

黒崎、手に持っていたチョークを離してしまふ。

チョークが床に落ち、折れてしまふ。

黒崎「……」

黒崎、折れたチョークを見て、拾いあげ、黒板の穴の中に入れる。マグネットを取り、プリントもどかす。

「市野瀬さんが好き」の文字を見る。

黒崎「……」

黒板消しを取り文字を消す黒崎。

黒崎「……」

中々、綺麗に消えない。

黒崎「……」

教室に山口が入って来る。

山口「あ、黒崎」

黒崎「……」

うつすら見える「市野瀬さんが好き」

山口「……」

黒板消しで消そうとする黒崎。

山口「あのさ」

手を止める黒崎。

山口「俺さ、黒板の事、よく分かんねえけど。

別にいつも綺麗にしておく必要は無いんじ

やないかな」

黒崎「……」

山口「うん。分かんねえけど」

黒崎「……」

黒崎、黒板消しを黒板の溝に置く。

○同・廊下（朝）

静かな廊下。

○同・教室

教壇に立つ田中。国語の授業が行われている。

一生懸命、板書する美子。

窓の景色を見ている黒崎。

黒崎「……」

黒板の右端の下には、うっすら「市野

瀬さんが好き」の文字。

その文字を見ている住子。

住子「……」

住子の前の席の女子生徒Aが、後ろを

振り返り小声で、

女子生徒A「黒板の右端、見えますか？」

住子「それがどうしたの？」

女子生徒A「誰が書いたのかな？」

住子「……きつと、今野さん。今野さん、市

野瀬さんの金魚の糞だから」

女子生徒A「ああ、なるほど」

住子「前、向いて。授業中だよ」

女子生徒A「ごめん」

前を向く女子生徒A。

住子「……」

○同・外観（昼）

T「1月」

○同・教室前

教室の前で立ち止まっている黒崎。

机で勉強をしている美子を見る。

黒崎「……」

黒板は少し汚い。

黒崎「……」

○同・廊下（昼）

T「2月」

○同・教室

少し汚い黒板の前に立つ真中と男子生

徒A。

真中が黒板に爪を立てて、不愉快な音を出す。

男子生徒A「やめろよ、それ！」

真中「お前が、金を貸すと言うまで、止めないからな！」

教室中に不愉快な音が響く。

女子生徒A「ちよつと、止めてよ！」

黒崎は、窓の景色を見ている。

隣の席に座っている美子、黒崎を見る。

美子「……」

後ろから、智美が、

智美「市野瀬さん！次、体育だよ」

美子「あ、うん」

智美「ほら行こう。真中の奴、うるさいし」

美子「う、うん」

教室の出口に向かう美子と、智美。

美子、途中で振り返り、黒崎を見る。

黒崎は窓の景色を見たまま。

黒崎「……」

美子「……」

悲しそうな顔をして教室を出て行く美子。

美子の顔を一瞬見てしまった住子。

住子「……」

真中の元に歩み寄る黒崎。

真中「もう一回、やろうか？」

男子生徒A「頼むから、止めてくれよ」

真中、黒板に爪を立てる。

黒崎「おい！（大きな声で）」

真中「うん？」

黒崎「止めろよ」

真中「あ……」

黒崎「黒板が嫌がってるじゃないか」

真中「……」

男子生徒A「……ほら止めろよ」

真中「う、うん。何かゴメン」

黒崎「……」

教室を出て行く真中と男子生徒A。

住子、黒崎の元に歩み寄る。

住子「ちよつと！」

黒崎「……はい」

住子「……黒板掃除してよ」

黒崎「え？」

住子「あんた、市野瀬さんの為に黒板掃除してたんではしょ」

黒崎「え？何で、それを」

住子「あんたを見てれば、分かるから」

黒崎「……」

住子「好きなんではしょ。市野瀬さんも、黒板も」

黒崎「……」

住子「好きなら、悲しませたりしたらダメではしょ」

黒崎「……」

住子「黒板の次は、市野瀬さんの為に行動したら？」

黒崎「……」

○ 同・廊下

廊下を歩く美子と智美。

智美「最近、黒板汚いと思わない？」

美子「う、うん」

智美「そういえば、黒崎君が黒板掃除をしてる所、最近、見てくない？」

美子「確かに」

智美「市野瀬さん、何か知らない？」

美子「え？」

○同・グラウンド

サッカーをしている男子生徒達。

黒崎は、グラウンドの端で座って、サ

ッカーを見ている。

黒崎「……」

黒崎の元に、ボールが転がってくる。

ボールを手に取る黒崎。

黒崎「……」

緒方が黒崎の元へ走って来る。

緒方「黒崎！」

立ち上がる黒崎。

緒方「何やってるんだよ。お前も参加しろよ」

黒崎「え？」

緒方「え？じゃねえよ。早く」

黒崎「あ……」

緒方「ほら、早く」

黒崎「う、うん」

黒崎、ボールを緒方に渡す。

緒方、ボールを男子生徒達の所に蹴り
だす。

緒方「黒崎は俺のチームな」

黒崎「うん」

黒崎と緒方、サッカーをしている男子
生徒達の所へ走り出す。

× × ×

美子と智美、遠くでサッカーをしてい
る男子生徒達を見ている。

美子「……」

智美「行こうか」

美子「笑ってる」

智美「え？」

美子「黒崎君が笑ってる」

サッカーをしている黒崎は笑顔。

智美「本当だ。初めて見たかも」

美子「……（美子も笑顔）」

黒崎、山口にパスをする。

黒崎「……（笑顔で）」

○同・男子更衣室

着替えている黒崎。

緒方が、黒崎にジュースを渡す。

緒方「はい」

黒崎「え？いいよ」

緒方「いいから飲めよ」

黒崎「ありがとう」

ジュースを受け取る黒崎。

緒方「サッカー楽しかっただろ」

黒崎「うん」

緒方「山口がさ黒崎の事を気にしててさ」

黒崎「……」

緒方「何か、ゴメンな。もっと早く一緒に

サッカー出来たら良かったのに」

黒崎「いや、俺、体育の授業の時、教室にい

たから」

緒方「ずっと？」

黒崎「出席の時だけいて、それ以外は教室に」

緒方「黒板掃除か」

黒崎「でも最近は辞めたんだ」

緒方「……市野瀬がさ、何か残念がってたよ」

黒崎「……市野瀬さんが？」

緒方「うん。元カノなんだけどさ」

黒崎「……」

緒方「この前、久しぶりに話したら、黒崎の話になって」

黒崎「僕なの？」

緒方「うん。黒崎君が最近元気が無いって」

黒崎「……」

緒方「また黒板を掃除して欲しいって」

黒崎「……」

緒方「市野瀬の為にさ、もう一度、黒板職人に復活してくれよ」

黒崎「……」

○同・廊下

廊下を歩く黒崎。

○同・教室

教室に入ってきた黒崎。

少し汚い黒板を見る。

黒崎「……」

黒板に向かう黒崎。

黒崎「……」

黒板消しを手取る。

黒崎「……」

黒板を黒板消しで拭き始める。

黒崎「……」

ゆっくり、丁寧に黒板を綺麗にしてい

く黒崎。

住子「ちよつと！」

黒崎、振り返ると住子が立っている。

住子「……もうチョークとか使わないでよ」

黒崎「え？あ、はい」

住子「……あんたでしよ、この前“好き”

とか黒板に書いたの」

黒崎「……はい」

住子「ちゃんと伝えてよ」

前の入り口から教室を出て行く住子。

後ろの入り口から、美子が教室に入り、

黒崎の元に歩み寄る。

美子「黒崎君」

黒崎「……」

美子「私も一緒に黒板掃除していい？」

黒崎「……うん」

黒崎、黒板消しを美子に手渡す。

受け取る美子。

美子「ありがとう」

黒崎「……（少し笑顔）」

○同・廊下

廊下を歩く住子。

後ろから女子生徒Aが、

女子生徒A「高橋さん！いいんですか？」

住子「いいよ。別に好きじゃないんだから」

女子生徒A「……いや、黒崎君が黒板を掃除

をしてるの」

住子「……ああ、いいよ。どうせ、あの人は黒板しか無いんだから」

○同・教室

黒板消しで黒板を綺麗にする美子。

黒崎も、黒板消しで黒板を綺麗にする。

美子「高橋さんから、黒崎君が黒板掃除を再開するかもしれないって聞いてね」

黒崎「そうなんだ」

美子「また黒板掃除してくれて嬉しい」

黒崎「僕も嬉しい」

美子「……」

少し沈黙があり、

黒崎「好きな市野瀬さんと黒板掃除が出来て」

美子「……うん。私も（微笑む）」

黒崎「……（微笑む）」

美子「……コツとかあるの？」

黒崎「あまり、力を入れない事かな」

美子「……」

黒崎「そうそう、上手」

美子「私も黒板職人になれるかな？」

黒崎「うん、なれると思う」

美子「本当？」

黒崎「絶対なれるよ」

美子「そうかな」

黒崎「うん」

美子「……楽しいね」

黒崎「うん」

○同・廊下（夕方）

T「3月」

○同・教室

黒板の前に立っている黒崎。

黒崎「……」

一礼する。

頭を上げて、

黒崎「……」

教室を出て行く黒崎。

黒板はとても綺麗。

(完)